

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 頼 思好

中国古代の戦国時代に現れた神仙の説は、道家思想や鬼神信仰等と融合しながら数々の神仙のキャラクターを生み出し、『列仙伝』をはじめとする神仙の伝記集も少なからず編纂されてきた。当初の神仙はほぼ男性であったが、女仙が重要な役割を担う上清経が東晋頃より登場したことなどもあり、女仙のみを扱う伝記集も作られるようになる。本論文は、このような女仙信仰および女仙伝記集の形成について、主に明代までの展開の基礎的部分をまとめ、さらに女仙信仰にまつわる文化が日本を中心とする東アジアにどのように伝播したかも考察を試みる。

論文は、序論と結論にあたる部分を含めて全九章から成る。まず第一章を序論と題し、先行研究の成果の整理を行いつつ論文全体の方針と構成を示す。第二章は、はじめに神仙の伝記を集めた神仙伝記集を概観しつつ、その中で女仙のみを集めた女仙伝記集がいかに成立・展開したかについて論ずる。第三章は、女仙伝記集の集大成と言える明代の『新鐫仙媛紀事』を編纂した楊爾曾という人物を考察し、この編纂事業の背景にある彼の道教信仰や明代の女仙信仰の流行について明らかにする。第四章は、現在確認できる『新鐫仙媛紀事』の版本を逐一取り上げて考察するほか、その構成上の特徴、および各女仙伝の資料的來源について詳密に考察する。第五章は、『水滸伝』に登場する九天玄女に着眼し、小説中のイメージは従来言われている宋真宗の天書事件のみならず、それ以前の九天玄女信仰に由来することを古い道教經典等を示しつつ論ずる。第六章は、まず西王母より伝えられたとされる道教の護符「五岳真形図」に二つのバリエーションがあることを説明し、それらがいかに日本に伝わり広汎に受容されたかについて解説する。第七章は、清初に渡来した仏僧の東皐心越により、航海の守護神である天妃すなわち媽祖の信仰が日本に伝えられた事情を検討する。第八章は、平田篤胤における道教信仰を「五岳真形図」受容の面から論じ、彼独特の「五岳」思想、およびその実践と伝承について考察する。第九章は論文全体を総括し、今後考えるべき課題等をまとめる。末尾に未公開資料を含む平田篤胤の道教関係資料を附録とする。

従来、女仙を専門に扱う研究は多くなかったが、特に本論文の前半のように女仙伝に焦点をあてて詳細に研究した論著はなかったので、今回の成果は研究史上意義深いものと言える。後半については本人の日本文化研究の浅さも若干窺われるが、一方でそこに画像等で示される原資料の多くは本人が根気よく収集した新発見のものであり、高い資料的価値をもつ。全体を通して東アジアにおける女仙信仰の研究を大きく推し進めたものであり、十分な学術的意義を有する。よって博士の学位を与えるに相応しいと判断する。